

事業報告令和3年度 教育事業 信州高遠ボランティア養成研修

令和3年6月5日（土）～6日（日）
【対象】高校生・大学生・社会人
【場所】国立信州高遠青少年自然の家

1. 趣旨

青少年教育施設のボランティアの役割を理解し、必要な知識・技能を習得する。自然の中で活動する楽しさを味わい、仲間と協働した学びあいから、ボランティア活動に対する意欲を高め、社会に貢献できる人材を育成する。

2. 事業の概要

(1)期日 令和3年6月5日（土）～6日（日）

(2)①参加者 36人（新規ボランティア 26名、法人ボランティア 10名）

②内訳 高校生9名、大学生26名、社会人1名

(3)日程

6月5日（土）		6月6日（日）
10:20 受付 10:40 開会式 10:50 「青少年施設の現状と運営」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 所長 穴澤弘輝	新規ボランティア	9:00 「安全管理Ⅰ 救急救命講習」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 応急手当普及員 11:00 「安全管理Ⅱ 感染症予防と対策」 講師：株式会社大塚製薬工場専任課長薬剤師 小林繁
	法人ボラ	9:00 「ボランティア交流会」 講師：ボランティア養成研修企画委員（法人ボランティア）
12:30 「ボランティア活動の技術Ⅰ」 14:30 「ボランティア活動の意義」 16:00 「青少年教育」 18:50 「ボランティア活動の技術Ⅱ」 講師：公益財団法人キープ協会環境教育事業部 副部長 関根健吾		13:10 「青少年教育施設におけるボランティアの役割」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 ボランティアコーディネーター ボランティア養成研修企画委員（法人ボランティア） 15:20 閉会式

3. 企画運営のポイント

- ・新規ボランティアと法人ボランティアが交流する場を設けることで、新規ボランティアに対して今後のボランティア活動への意欲を喚起する機会とする。
- ・法人ボランティアによる企画委員を設置し、企画運営に携わってもらうことで、法人ボランティアとしての自覚を高め、ボランティアに必要な知識・技能を磨く機会とする。

4. 参加者の声と主な活動

- ・無知の状態に参加したので、どんな所なのか詳しく説明して下さり分かりやすかった。どのような経緯でこの施設ができたのかが分かり、どういう活動をしているのかも分かった。（青少年教育施設の現状と運営）
- ・グループの人と協力して、1本の木について詩を作っていくのがおもしろくて、グループ内での仲を深められて良かった。また、1枚の葉から船を作ったりと、自然の中にあるものでも楽しい遊びができることを知った。（ボランティア活動の技術）
- ・山の中がとても静かで、キレイで、怖さを感じるくらいだったし、自然が何なのか感じられた気がした。（ボランティア活動の技術）
- ・ナイトハイクでの、しんと静まりかえった中での鳥のさえずり、セミの鳴き声、高遠ならではの自然を体験することがで

きた。(ボランティア活動の技術)

・ボランティアをなぜやるのか、その魅力は何なのかを改めて考える機会になった。自分のことも、これからボランティアになる人たちのニーズも知れてよかった。(ボランティア活動の意義)

・教育をする前に、自分自身が豊かな指導者になるということが印象に残っている。良いボランティア3カ条は人によって違うと思ったが、対象者に目を向けることは一番大切だと分かった。(青少年教育)

・救急救命講習では、AEDや胸骨圧迫と初めてのことばかりでしたが、人の命を守るために必要なことなので、忘れずに常に使えるようにしたいと思った。熱中症予防対策では、予防や実際にかかったときの対応も学べたのでとてもためになった。(安全管理Ⅰ救急救命講習、安全管理Ⅱ感染症予防と対策)

・おもしろく楽しく今まで大切にしてきたことを考え、伝えることができた。より多くのみなさんとこういう話をしていきたいと思った。(ボランティア交流会)

・高遠でしかできない、その場を活かしたゲームだった。本当にすてきな活動だった。今回あったような自然を使ったゲームを子供達としていきたい。(青少年教育施設におけるボランティアの役割)

開会式 アイスブレイク



ボランティア活動の技術



青少年教育、ボランティア活動の意義



安全管理



ボランティア交流会



青少年教育施設におけるボランティアの役割



5. 成果と課題

(1)参加者アンケート結果 事業全体を通して 満足:33名 未回答:3名

(2)成果

・昨年の課題であった大学の集中講義との重なりについて、本年度は事前に大学に確認をとることで、集中講義との重なりを避けることができた。

・昨年の課題であった企画委員のプログラムと講師の講義内容の重複について、本年度は早い段階で講師と打合せを行い、内容の重複が生じないように調整したうえで実施することができた。

・新規ボランティアと法人ボランティアの合同開催にすることで、新規ボランティアが現役で活動する法人ボランティアの声を聞くことができ、青少年教育施設におけるボランティアの役割について実践的に学ぶ機会となった。

・高校生、大学生、社会人と幅広い年代の参加者が、仲間と協働して自然の中で活動する楽しさを学び、青少年教育施設のボランティアとして必要な知識・技能を習得することができた。

(3)課題

・新型コロナウイルス感染拡大の影響により、結果として県内からの参加者のみになってしまった。来年度は近隣の県からも参加してもらえるように広報していきたい。